

---

# 王国キット

早瀬恭一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王国キット

### 【Nコード】

N4288V

### 【作者名】

早瀬恭一

### 【あらすじ】

鉄と油の臭いの混じる王国”ダル”

油石と呼ばれる資源を求め、各国から人々が集まるこの街で、油石に関わる特殊な任務を行う部隊の一人にヴァンという少年がいた。ヴァンには、他人の思考をイメージとして読み取る力があつた。彼はその不思議な能力を生かしながら、時には命の危険に関わる任務をこなしていた。

ある日仕事を終えたヴァンのもとに一人の少女が現れる。そして、その出会いを引き金とするように、彼は王国の闇へと繋がる事件に巻き込まれていく……。

## 『油石の守り手』

乾いた平原に背の低いマシユマロのような草木とごつごつした岩の広がる大地の一角に、標高2000m級の山々から流れ込んだ水によって形成した湖を拠点に世界でも有数の国家として繁栄を続けてきた人口5万の都市『ダル』があった。街の正門と通って感じるのは、鉄と油の混じった匂いが砂漠の熱で膨張したように感じる独特の圧迫感と、メインストリートの先に見える国王の住む城である。湖のほとりに立てられた城を中心に扇状に広がる街中では、周辺の国々から持ち込まれた食料、装飾品、金属など、世界中のあらゆる物が取引され年中活気に満ちていた。

その城から湖に沿ってしばらく歩くと、一般市民の立ち入りが禁止されている街の東側にたどり着く。そこには、まるで神が地面をすくって食べたような深い半円の穴が空いていた。穴の底では赤茶けた泥が湧き出るように採れ、火を着ければ泥の中に含まれる密度の高い油分がごうごうと燃え盛るその泥は、当時木材が熱資源の中心であった周辺の国で高出力なエネルギーとして取引され、泥を扱うことは商人たちの憧れとなっていた。

その泥を何度も精製し純度を高めた上で、特定の温度と圧力で圧縮、さらに添加剤を加えることで固形にまでしたものは油石と呼ばれていた。その製造技術はダルに住む職人だけが知っており、職人を管理、運営してきた歴代の王は、他国の政治に影響を与えるだけの力を持っていた。

そのダルの街に、砂漠を撫でる乾いた風が吹く。  
今では使われなくなった建物が立ち並ぶダル旧市街地のとあるアパート。その屋上に二人の男が立っていた。

かき上げた短髪のくせ毛と、だらつと着た白いシャツから覗く焼けた肌が特徴の男が、暮れかけの陽を背に受けながら喋り出した。

「目標は建屋を出て東に向かっている。さっきまで聞こえた石をどかすような音はもう聞こえない。どうやら、廃墟の中1人つきりで何かを探していたらしいが……。ヴァン、奴の姿はどうだ？」

ヴァンと呼ばれた少年。長身と力強い眼差しが実際より大人びた雰囲気をおぼせる黒髪の少年が、地平線の向こうから吹く乾いた風を押し返すように答えた。

「茶色のフードで顔を覆っていて表情は見えないけど、口元に髭が生えている。それと、腰に水の入ったボトルを付けてるから、最近この街に入ったか、それともこの街から出て行くつもりなんだろう。この距離だと細かい所までは見えないけどどうする？」

「残りは奴をとっ捕まえた後で調べればいいさ。こんな仕事さつさと終わらせて俺は帰るぞ。城に帰った後でおまえは好きなだけ奴の思考を読み取ってればいいさ」

「他人の思考を読み取るのが楽しいわけないだろ？ あれは濁った海に潜るようなもんなんだ。ましてそこから宝を見つけてこいなんて、いつそ海が干上がるのを待ってる方がよっぽど利口だ」

夜通し続く取り調べを想像し疲れた顔を見せるヴァンを横目に、にやけ面の男が切り返した。

「海が干上がった所で前前の仕事は変わらないさ。泥水に潜るか、ヘドロに手をつ込むかの違いでおまえは汚れ担当なんだよ」

「まったく……。たまには透き通った湖で泳がせろよ」

はぁ、とヴァンが息を吐くと同時に、1 kmほど離れた建物の屋上でチカチカと何かが光った。ヴァンの隣にいた男がスツと意識を光の方向へ集中すると、その耳に普通の人間には聞こえない甲高い笛の音が届いた。光で事前に合図を送る場合は、長い指令であることが大半であるため、彼は胸元から紙とペンを取り出すと、音の高低と長さから成る暗号な言語へ変換し一字一字メモに残し始めた。

ヴァンはそのメモを横で覗き見ながら、殴り書きの汚いメモから指示の内容を読み取った。

（なになに。『ポルトギー無駄口を叩くのも大概にしろ。広場で襲撃を行う。お前たちは背後に回り込め』）

ヴァンが顔を上げると、メモを取り終えたポルトギーと目があつた。

「……。なんで俺だけ怒られるんだよ」

「それがポーの担当だろ？」ヴァンはにやけ面でそう返した。

役目を終えたメモをポルトギーが懐にしまっている間に、ヴァンは屋上の反対側へまわり、そのまま地上へと飛び降りた。地面に着地する瞬間、ヴァンの脚部を覆うように装着されたプロテクターから白い蒸気が吹き出し着地の衝撃を抑え込んだ。

（最新鋭の装備とはいえ、飛び降りる瞬間は何度やっても慣れないな）

先月支給されたばかりの脚部プロテクターを見ながらヴァンが呟いた。専用の職人が作動を確認しているとはいえ、所詮人間の作り上げたものだ。プロテクターが誤作動を起こし着地と同時に両足が吹き飛んだ事例を耳にしたことがある。

（命を天秤にかけて働いて、いったい何が欲しいんだろうね）

そんな感傷に浸っていると、蒸気を吹かせたポルトギーがすぐ傍へと振ってきた。着地の瞬間に吹き出す空気のせいで、ヴァンの背中が砂にまみれた。

「はははっ。相変わらずお前の着地は腰が引けているな。もっと俺みたいにスマートにできないのか？」

「……いい加減、俺の側に着地するのはやめろよ」

諦めた顔つきでついた息は、砂の味がした。

ヴァンは周囲に舞い上がった砂の向こうを探った。いかに世界有数の技術を持つダルとはいえ、ヴァン達が身につけている装備はごく一部の人間にのみ使用を許されたものであり、街の住人であつても知らない人間の方が多い。人の出入りが制限されている旧市街地とは言つても、抜け道を通って入り込んだ浮浪者や、危険知らずの子供たちが建物の中に潜んでいる事があり、前者なら牢獄行き、後者なら記憶の消去を行わなければならない。

周囲の気配を探り終えたところ、再びポルトギーの耳に笛の音が届いた。今回の指令は短く、2つの単語の繰り返しだった。

「なにっ!？」指令を受け取ったポルトギーが珍しく動揺を見せた。

「ポー。驚いてないで指令の内容を教えるよ」

冷静を装いながらも、ヴァンは自分の声が微かに震えているのを感じた。ポルトギーがここまで驚愕をあらわにするほどの内容だ。都合の良い指令であるはずがない。

「ちつ。指令の内容は”機密”と”強制排除”だ」そう言い放ったポルトギーの顔からは、いつもの緩い雰囲気が消えていた。

「機密」

その単語が、油石の濃度を示すランクの中で最も高位にあたることなど、互いに確認するまでもなかった。

先ほどまで監視していたフードの男が歩いた道をなぞりながら、ヴァンは鼓動の高鳴りを聞いていた。最先端の武装を身につけているとはいえ、体の大半は普通の人間と変わらない。まして相手が危険なシロモノを所持しているとすると普通の人間でない可能性も考えられる。一つのミスで街の一部がこの旧市街地のようになったり不思議じゃない。

しばらくすると、建物の陰から覗いた道の向こうに、先ほどのフードを被った男の姿が見えた。その先には、今は使われていない噴水と、新市街地へと延びる大通りがあった。旧市街地は複雑に入り組んでいるため、土地勘のない人間はこの広場を目印に行動することが多い。

（やっぱり、この街の住人じゃないな）



そう思った次の瞬間、心臓をギュツと捕まれたような音の圧力と共に砂のカーテンがヴァンたちの視界を遮った。狙撃班によって打ち出された手のひら程度の鉄球は、膨張した油石の圧力によって打ち出され、それは地面の形を変えるほどの運動量を持っていた。移動式の砲台を扱う狙撃班。その砲撃を足元に受ければほとんどの人間は地面と熱いキスを交わすことになる。

空へと拡散し続ける砂煙の影に、右腕を直角に、親指を立てるポルトギーのGoのサインを見つけると、ヴァンは土ぼこり舞う広場の中へと突入した。

「おいっ、奴がいないぞ。まさか埋もれたか？」

肌をなぞる強い風が、箒で庭先を掃くように、周囲に待った砂を取り去っているにも関わらず、広場には誰の姿も見当たらなかった。

「狙撃班がそんなミスをするとは思えない。油断するなよ、ポー」

「しかし、あの攻撃を受けて立っていられるとは」

思えない、と言いかけて、突然ポルトギーの体が真後ろに吹き飛んだ。

「ポー！」

相棒の元へ駆け寄ろうとする衝動をぐつと押さえ込み、ヴァンは依然として土ぼこり立ち込める広場の先を見続けた。おぼろげながらも、薄気味悪い洞穴の中で獲物が罠にかかるのをじっと待つ、そんなゾツとするイメージが伝わってきたからだ。やがて視界の中に、妙な人影が映った。

ヴァンは右手に持っていたハンディタイプの油石弾を相手の腹部に向けて構えた。しかし、弾を撃とうとした瞬間そこに人影はなく、それは5mは離れている位置に移動していた。

「！」

驚くヴァンを他所に、その影は手に持った筒を突き出した。「やばいっ！」そう思い咄嗟にしゃがんだヴァンの頭上を高速の物体が掠めた。”ドン！”という鋭い衝撃音の後で、岩が崩れるような音が背後から聞こえた。

「しくじったか」

実際に聞こえたわけではないが相手の焦った口元がそう言っていた。相手の武器は単発式で、次の弾を補充するのに多少の時間がかかるようだった。

すると、男は懐からいびつな刃を持つナイフを取り出すと、一直線にヴァンに突っ込んできた。互いの距離は、全力で走っても10秒はかかるだけ離れていた。にも関わらず、男はほんの数秒でヴァンの目の前に迫ってきた。嘘だろ？ 焦る気持ちを抑えつつ、ヴァンはしゃがんだままの姿勢で両足のプロテクターを手でなぞり、くるぶしの少し上から垂れ下がったピンを抜き取った。

フードの男が、その右手に持ったナイフでしゃがんだヴァンの目を切り裂くよう一閃した瞬間、男が見たのはしゃがんだままの姿勢から自分を飛び越すまでに跳躍したヴァンの残像だった。油石の小規模な爆発を制御することで、しゃがんだままの姿勢から一転してフードの男の頭上へと舞い上がったヴァンは、目を見張り、自分

を見上げる足元の男の頭をプロテクター付の足で蹴り飛ばした。

焼けた地面に倒れたフードの男。近寄って意識を探ってみると、音の飛んだレコードのように痛み感覚が伝わってきた。意識はないようだ。

「はああ。なんとか片付いた」

倒れている男の体を手錠で拘束し、ロープのうちポケットや男の体を探る。油石を回収しろとの指示だったが、それらしき物は見つからなかった。

「どこかに隠したのか？ 意識が戻った後で聞きだすしかないか……」

そう判断すると、ヴァンは向こうの地面に転がっている親友の元へと駆け寄った。

## 『油石の守り手』（後書き）

どうも初めまして。前回の作品から、約一年ぶりの連載となります。過去の投稿と違い、多くのキャラクターが登場する長編小説になります。ようやく最後までプロットが完成したので連載を開始しました。

ヴァンと言う少年が主人公の、異国の街を舞台にしたファンタジーです。第2部までが物語の導入にあたるので、お口に合わないようでしたら、その辺でペツと吐き出して下さい。

それでは、しばらくの間お付き合い下さい。

## 『Stairs to mystery』

一連の騒動から十分ほど経った後、広場には数名の人間が集まっていた。その中の一人、細い目と対照的な太い眉毛が獣を思い起こさせる40前後の男がヴァンに近寄ってきた。

「ご苦労だったな」

「隊長」

「ポルトギーの様子はどうか？」

「先ほど救護班への搬送が完了しました。命に別状はありません」

「そうか。それは残念だ」

その言葉にヴァンは少しだけ驚いた。目の前の男”デルテロ”は先ほどのような作戦中も城での訓練でも常に威厳をまとうており、こんな皮肉めいたジョークを言うなど想像もしていなかったからだ。

しかしそんな驚きもつかの間のことで、デルテロに聞かなければならないことを思い出した。

「それで、奴の持っていた油石は？」

先ほどから、辺りの搜索を指示する気配がない。油石の在り処について既に目星をつけているとしか思えなかった。

「今回の詳細は明日城で報告する。お前は装備を返却し、自宅で待

機している。以上だ」

そう言って早々に立ち去るデルテロの背中を見つめても、彼からはどんなイメージも読み取ることができなかった。

甲高い鉄の棒がぶつかる音が響く新市街地の一角。油石の対価として他国から買い付けてきた鉄やニッケルなどを用いて、伝統的なレンガ造りの建物から強度と加工性に優れた鉄鋼が主流となっていた街の中で、未だレンガの面影を残す場末の酒場がヴァンのお気に入りであった。

その店の奥にあるテーブルでヴァンが二杯目のウイスキーを注文したところ店の入り口が開きポルトギーが何食わぬ顔で入ってきた。

「ポー、よく救護室から抜け出せたな。大した傷じゃなかったとはいえ、検査に半日はかかるだろう?」

「あんな退屈な部屋にいてたまるか。俺の話術を持っていれば、看護婦を説得するのなんざ楽勝さ」

「まったく。そのキレを仕事に見せてくれよ」

「なら次の対象がいい女であることを祈るんだな」

琥珀色の酒をヴァンから奪い取ると、ポルトギーは得意の笑顔を浮かべた。

「しかし、ポー。最近変だと思わないか?」

「なんのことだ?」

「近頃、高濃度の油石が多すぎる。今回の一件だって、一年前も前なら大騒ぎになってもおかしくない代物だ。それがここ数ヶ月の間にいくつも報告されている」

「技術は進歩し続けるものだ。一年もあればこの街は全くの別物に変わっちまう。それは精製技術だって同じことだろう？」

「だけど、高濃度の油石を精製するには相応の設備が必要だろ？この街で何かが起こってるとしたか考えられない」

「何かって何だよ」

「それは、わからない。でも大きな力が働いていることは確かだ」

「大きな力？ 質のいい油石が作りやすくなるおまじないか何かか？ それとも、神様が気まぐれを起こしているとでも言うのか？」

「……」

「お前は考えすぎなんだよ。そんなだから、まともに女の一人も作れないんだ」

「それは関係ないだろう」

「大有りさ。それだけで人生の3割は損してる。食って、抱いて、寝て、起きてを繰り返すのが正常な人生ってもんさ。油石なんてその合間に考えてりゃいいんだよ」

「そんなこと言って、隊長に聞かれたらケツの穴に油石をぶち込まれるぞ」

「油石が便秘解消に役立つかい実験になる」

「まったく」

その後ヴァンは、いつもの他愛もない話とポルトギーの自慢話で時間を過ごし、バーのマスターに店を追い出されるまで居座った。酒場を出てポルトギーと別れた後は、自分の家に向かってフラフラ歩いていた。事件のあった直後なのでいつもより神経がとがっており、そのせいでアルコールを取り過ぎたらしい。最低限の警戒を行いながら、人通りの少なくなったメインストリートを曲がって小さな路地に入る。暗闇の中を進むと見えてくる、真新しいアパートの二階が彼の住処だった。

階段を上りながらドアの鍵を取り出そうと、ズボンの後ろポケットに手をつ込んだ。階段を昇りきり、廊下の角を曲がったところでヴァンは自分の家の前に誰かが座っているに気がついた。警戒を悟られぬよう、鍵を取り出すフリをしながら、ベルトにかけられた油石弾の位置を手で探った。

（事件の後ほど気をつける。……隊長の口癖だったな）

薄い雲に隠れた月が照らすアパートの廊下は、まるで初めて通る道のように不気味に思えた。

「そこは俺の家なんだけど、どいてくれないか」

ヴァンは、自分が酔っていることを隠すため、発音に気をつけながらドアの前にいる人物に語りかけた。すると、膝を抱えてうずくまっていた顔が少しだけ持ち上がり、ゆっくりとした動きでヴァン



の方を向いた。

「あなたが　ヴァン？」

名前を呼ばれヴァンは動揺した。元々、自分の住処を人に話す性格ではないし、加えて、今の家に移ってからそれほど時間が経っていない。この場所に住んでいることを知っている人間は限られている。

「そうだけど、どこかで会ったことがある？」

平静を装いながら、いつでも油石弾を放てるよう右手を構えた。

ヴァンの言葉を聞くと、その不審者は再びうつむいてしまった。

互いの沈黙の中、昼間とは違い少し肌寒く感じる風の感触だけが妙に際立っていた。ヴァンが次の言葉を搜していると、ふいに周りの風景が光を取り戻した。雲間に隠れていた月が再びダルの街と向かい合ったようだ。

すると、その光を浴びて命を取り戻したかのように、見知らぬ訪問者は突然立ち上がり、ヴァンと向かい合った。

……綺麗な瞳だ。ヴァンがまず思ったことはそんなことだった。薄い緑をガラスに溶かしたような瞳は、目にした者の心を穏やかにさせる魅力を持っていた。

よく見るとそれは16〜17歳程度の少女だった（そういうヴァンも大して変わらない歳だが）。その見覚えのない少女は、呼吸を整えた後で

「私をかくまって」

震えの混じる声で、はつきりと告げた。

ヴァンは何も言わず、助けを訴える少女の目を真つ直ぐに見据えた。目の前の少女が何を目論んでいるのかを確認したかったからだ。人は、相手の発する言葉の響きや瞳孔の具合から、その言葉の真偽や思惑を読み取ることができる。ヴァンには、それに加えて相手に意識を集中することで、もやのような景色を読み取る能力があった。今の仕事も、その能力を買われてのことだった。

しかし、なぜか目の前の少女からは何の感情も読み取ることができなかった。いくら意識を集中しても、どんなイメージも掴めず、代わりに脳をチクツと指す頭痛が襲ってきた。これと同じような感覚を、ヴァンは何度か味わったことがある。

（ポルトギーや隊長のときと同じだ。思考を読み取れない側の人間か）

イメージを読み取れる人間と読み取れない人間。今までも何度か両者を分かつ原因について調べたことがあるが、結局よく分からなかった。

これ以上目の前の少女を見つめても何の進展もないため、その真意は言葉を使って聞きだすことにした。

「助けが欲しいのなら、城に相談すればいい。わざわざ俺を指名する理由は何だ？ それに、誰から俺のことを聞いた？」

言った後で、少し口調が厳しすぎたか？ と後悔した。胡散臭い

相手だけに、優しさを付け忘れた。

「それは、後で話すわ」

「今、話してもらえると助かるな」

「それより、早く家に入れて頂戴。こんなに夜が寒いなんて、知らなかったわ」

「この街の人間じゃないのか？」

「……」

そこで二人の会話が途切れた。

ヴァンはますます目の前にいる少女の存在を疑った。ダルで生まれ育ったヴァンは、他の街に行ったことがない。他国の人間となると、市場にいる商人くらいしか知らない。その中にこんな口の悪い少女がいた記憶は見つからなかった。

（事件のあった後で、素性の知れない人間からの接触。城に引き渡した方が無難だな）

そう考えたヴァンは、少女を家の中に入れることにした。隙を見て城に連絡を取り、警備兵が来るまでの間は下手に刺激しないでおこうと考えた。

ヴァンは左手でポケットから鍵を取り出すと、鍵穴に差し込んだ。ヴァンは鍵を持った手でドアを開けると、

「ひとまず、中で話を聞くよ」

そう少女に打診した。素性の知れない相手であることに変わりはないので、右手はいつでも油石弾を使えるよう自由にしてある。

「始めからそうしなさいよ」

両手で服についた埃を払いながら、ボソッと少女が呟くのが聞こえた。

（たちが悪い。さっさと兵を呼んで引き取ってもらおう）

明日は朝から城で今日の事件の解析結果を聞く必要がある。ポルトギーの自慢話など聞かずに、隊長の指示通りさっさと家に帰れば良かったと今更ながら後悔した。

ヴァンは家の中に少女を通すと、部屋を中心に置かれたテーブルの上にある照明に火を入れた。暖炉にも火を入れると、18畳ほどのリビング全体が赤褐色の光で照らされた。

「今飲み物を出すから、ソファアにでも座って」

「……わかったわ」

先ほどまで僅かに揺れていた少女の声が、少し落ち着いたように感じた。また、その表情も少しリラックスしているように見えた。

（やっと家の中に入れて安心したのか？ ま、笛は手元にあるわけだし。後は城に連絡を取るだけさ。どんな事情があるにせよ、城で保護してもらう方が危険は少ないだろう）

ヴァンはそう自分に言い聞かせた。家の中を物珍しそうにキヨロキヨロ見渡す少女の顔を見て、胸の中の良心が多少ざわついたが、今は仕事で大きな事件が続いており、これ以上の厄介事は避けたいと言っのが本音だった。

ヴァンは左の腰に付けてある小さな鉄の板に手をかけた。板には、息を吹き込む穴が空いており、通常の人間には聞こえない音色が鳴るように出来ている。ヴァン自身にも音は聞こえないが、ポルトギーや城の一部の人間は音を拾うことが可能で、この音のパターンによつて言葉のやり取りができた。音を拾えるポルトギーが側にいないため、城にいる連絡班に一方的に話しかけることしかできないが、兵を呼ぶだけなら問題ない。

この技術も一部の人間だけが知っているものであり、連絡中の姿を見られても、目の前の少女にはヴァンが鉄の板を加えているようにしか見えないはずである。しかし下手に警戒されないう、また音が城に届きやすいよう、キッチンの勝手口から外に出てから笛を吹くことにした。

「飲み物はコーヒーでいい？　今入れてくるから、そこで待ってて」

「そんなことを言つて、他の誰かに連絡を取ったら、どうなるかわかつてるでしょうね？」

ヴァンの思惑はあっさり見破られた。しかし手品の種が分からなければいくらかでも騙しようがある。

「家の中からどうやって連絡をとるんだよ？　君は少し勘繰りすぎだ」

ヴァンは、今日一番のやさしい笑みを浮かべて少女に語りかけた。

「あなたの腰についているその笛。城に連絡を取るためのものでしょ？ 連絡を取らないというならここに置いて行きなさいよ」

その言葉を聞いてヴァンの態度が一変した。右手に油石弾を構えると、少女の胸の辺りに狙いを定めた。笛の存在を知っていると、思っていた以上に危険な人物だ。多少残っていた優しさを頭の中から追い出し、仕事の顔つきに変わる。

「お前は誰だ？」

威嚇するようなヴァンの声。しかし少女は顔色を変えず、

「いきなり武器を向けるなんて失礼よ？」そう言い、少し怒ったような目線をヴァンに向けた。

「この街の人間ではないようだが、なぜ笛の存在を知っている。何が目的でこの街に潜入した？」

「あら、私がこの街の者でないといつ言ったかしら？ 確かにここ数年は他国へ留学していたけれど、れっきとしたダルの生まれよ？」

「……留学？」

ヴァンはもう一度少女の身なりを観察した。肌に張り付く白のインナーに上質な青の布を羽織り、下は足を覆い隠す長いスカート。確かに、この街では見かけない身なりしている。

「どこかの貴族の娘か？」

笛の秘密を知っており、さらに留学するだけの財力を持っているとなると、候補は限られてくる。どの家系に年頃の娘がいるか、仕事以上に熱心に調査しているポルトギーの自慢話を、もう少し真面目に聞いておけば良かった。

「いや、おかしい。貴族の娘だったとして、なぜ自分の家に帰らない？」

自身に問いかけるように、ヴァンが質問をぶつける。一方、少女は「家出中なの」

ヴァンの反応を楽しむようにコロコロと笑っていた。

ヴァンは戸惑いながらも、もう一度目の前の少女を観察した。今度は主に身体的部分に注目して。

（身長は150ちょい。顔は、綺麗な顔つきだが子供っぽさが残っているな。胸は……）

とても残念だな、と思った。

相変わらず不審者であることに変わりはないが、暗殺者やスパイにしては言動がお粗末だ。そこで、まずは態度を改めて、彼女の話聞くことにした。

武器をベルトにかけ直し、近くにあった椅子に腰をかける。ひと呼吸おいて、今度はゆっくりとした口調で質問を繰り返した。

「それで……。留学から帰ってきて、なぜ家に帰らない？」

ヴァンの態度が変わったことを察したのか、先ほどまでおどけていた少女の顔が曇った。

「家には、帰れないの。『帰るべきじゃない』って」

「帰るべきじゃない？ なぜ？」

「分からないわ。留学中に、いつも手紙を送ってくれた人がいて、その人が『あなたのところに行きなさい』って」

それを聞いて、ヴァンはますます混乱した。留学中の娘が自分の元に行くよう指示された。剣と伝統を武器に国を守る貴族とはほとんど接点も持たない自分のところに。

「手紙の送り主に心当たりは？」

ヴァンがそう言うと、少女は首を振った。

（普通、差出人不明の人間の言葉を信じるか？）

少女の言葉を信じるには、時期尚早だと感じた。

しかし、そこまでして自分に取り入ろうとするメリットも浮かばなかった。職務を遂行する間身に着ける最先端の装備は、仕事が片付いたら城の保管庫に返すのが常であり、今日の仕事で手に入れた油石も既にデルテロに渡してある。一般人よりは賃金の高い仕事に就いているため、暖炉には油分を含んだ泥をくべるのではなく、低密度に精製された油石を利用しているが、それも市場で買った物であり、わざわざ盗みにくるような価値はない。



やがて少女は、「今日は、疲れたわ」と言い残すと寝室へと消えていった。許可なくベットを占領されたヴァンは、仕方なくソファ―に寝転ぶと、油石弾をクッションの下に隠して横になった。寝室のドアに火掻き棒を立てかけて置いたので、彼女が寝室のドアを開ければ棒が倒れ、音が鳴る。寝込みを襲われる心配は少ない。

高密度の油石が絡む近頃の事件、不思議な輝きを放つ石、そして、正体不明の少女との出会い。

（いったい、この街で何が起こっているんだ？）

頑丈に閉められた遺跡の一部屋。そこから地下へと続く階段を見つけたときのような、常識の通用しない世界に対する恐怖と、胸の内ではパチパチとはじける好奇心を抑えながら、やがてヴァンは眠りに落ちた。

## 『日常と非日常の交わる手紙』

翌日、ヴァンはいつもより少し早い時間に目覚めると、真つ先に寝室のドアに目をやった。昨晚立てかけておいた棒は、そのままの状態ですらに寄りかかっていた。

（とりあえず、夜中に起きた形跡はなしか……）

足音を消しながらドアに近づき、そつと火搔き棒を掴み、暖炉の脇に戻した。物音で少女が目覚めないよう身長に部屋を動きながら身支度をし、「仕事に行ってくる」という簡単なメモを残して部屋を出た。

事件によつては数日間家を空けることがざらにあるヴァンにとつて、住居は誰にも邪魔されず休息をとるための場所であり、大切な物は常に身につけているか、家よりも安全な場所に預けてある。藪をつつついて朝からひと悶着を起こすよりも、遅れずに城に出勤する方を選んだ。

街の中心部まで足を運び、市場でミルクと焼きたてのパンを買った。まだ開店していない服屋の前に座りやすそうな階段を見つけると、時間を食べるようにゆっくりと朝食をとった。

やがて、市場に活気が灯り始めた頃、朝を告げる鐘の音がダルの街に響き渡った。元々は敵の襲撃を知らせるために作られたものだが、いつからか、1日の始まりを告げるダルの街の風物詩になっていた。その鐘の音を合図に、ヴァンはゆっくりと立ち上がると城に向けて歩き出した。

20分ほど歩くと、すっかり見慣れた城の入り口が見えてきた。高くそびえる城壁と城壁の間。オブジェのように微動だにしない兵士が守りを固める門をくぐり、城壁の内側へ入る。目の前には真っ直ぐに伸びた石畳とその先には2つ目の門が見え、緑が茂る左右の芝生では朝早くから剣術の稽古を行う兵士たちの姿があった。

「朝から元気だな」と感想を漏らしながら道なりに進み、城の内部に入る。初見では必ず迷う複雑な通路を辿り、ようやく自分の仕事場に着いた。

ノックの後でドアを開けると、既に何人かの同僚が目についた。

「おはよう」

誰に向けたわけではなく、むしろプライベートから仕事にへ気持直を切り替えるための合図だった。しかし今日は、同僚の1人が反応した。

「おはよう、ヴァン。昨日はすまなかったな」

身長185cm、体重80kg程度の筋肉質の男。正確な名前は聞いたことがないが、隊のメンバーはマルと呼んでいた。

「昨日？ 何のことだよ？」

まさか例の少女に関して知っているのではないかと、一瞬心がざわついた。

「昨日、俺たちが狙撃に失敗したせいで、おまえを危険な目に遭わせちゃった。すまなかったな」

そのマルの言葉に、ヴァンは期待外れに対する落胆と不思議な安堵を感じた。

「昨日のは気にしないでくれ。あいつは妙な動きをしていたんだ。狙撃が外れても無理はない」

「そう言ってもらえると助かるよ」

そのゴツい見た目とは裏腹に、誰よりもメンバーのことを気にかけるのがマルの特徴だった。

「そうよ、あまり気に病む必要はないわ。ポルトギーが怪我をしたのは、彼自身の落ち度だわ」

部屋の一番前に座っていた女”ルチア”が、体を半分だけひねりながら会話に割り込んできた。

「大体、貴方たちは無駄口が多すぎるの。作戦行動中にも関わらず、どれだけでもない会話をすれば気が済むのかしら」

まったく、と言いたげな表情を見せた後、ルチアは再び前を向いてしまった。

彼女はポルトギーより少し年上で、隊の中ではデルテロを除けば最も年長者である。目の良さと読唇術を武器に、デルテロの補佐・秘書としての役割を担っている。他の班の動向、特に連絡手段に乏しいヴァンとポルトギーの突入班の動向を監視し、会話の内容を逐一デルテロに報告している。

ポルトギーの無駄口の多さには同意なので、ヴァンは特に言い返すことなく部屋の後ろに座った。

それから10分ほどすると、ポルトギーが入ってきた。途中ルチアが遅刻を咎めるような視線を送ったが、それに気づいていながら素知らぬ振りでやり過ぎあたりは普段と変わらぬ光景である。後は、デルテロが現れるまでの間、隣に座ったポルトギーから他愛もない話を聞けば日常を再現できるが、今日に限っては違っていた。

「おい、ヴァン」

やけに小さな声でポルトギーが話しかけてきた。

「昨日の帰り、尾行されなかったか？」

いつにもなく、真面目な口調だった。

「尾行？ そんな気配はなかったけど？」

「そうか……。なに、俺の勘違いならいいんだ」

そう言つとポルトギーは手で自分の口元を覆うようにし黙り込んでしまった。真剣な表情だったので、なぜそんなことを言い出したのか聞こうか迷っているうちに、デルテロが現れてしまった。

「揃っているな」

そんな短い挨拶の後で、今日の任務について話し出した。

「昨日捉えた男についてだが、まだ解析が終わっていない。しかし、

職人の誰かと接触し油石を手に入れようとしていたようだ。解析が済み次第その職人から事情を聞く。今のうちに突入経路を割り出しておけ」

「突入経路の割り出しって、容疑者が分からない状態でどうしろってんですか？ まさか、全部の職人の家を回れとでも？」ポルトギーが口をはさんだ。

「その通りだ」デルテロが答えた。

「容疑者の名が分かってから行動したのでは遅すぎる。本来、油石の機密を護るお前たちは、職人の数、住处、各々が得意とする精製技術といった情報は当然把握しておかねばならないのだ。これを機に、油石の作り手に対する意識を高める」

「はあ？ 勘弁してくれよ」

すっかりうなだれたポルトギーが、横でデートがどうかブツブツ文句を言っていた。

「マル、シエーラ、お前たち2人は西側の職人からあたれ。ルチア、ポルトギー、お前たちは東側だ。それぞれの職人の特徴、家族構成、そして突入を想定した人員配置を報告しろ。以上だ」

1人困惑するヴァンを残し、それぞれのメンバーが席を立った。ポルトギーが去り際に「おまえ、何したんだ？」と問いかけてきたが、特に思い当たる節は、あまりなかった。

メンバーが部屋から出ていき、ヴァンとデルテロだけが残された。静かに目を瞑って微動だにしないデルテロに痺れを切らし、ヴァン

が口を開いた。

「それで、隊長。私は何をすれば良いのでしょうか？ イメージング班に加わり、昨日の男の思考を読み取れば良いのでしょうか？」

ゆつくりと二呼吸はした後で、デルテロは目を開けるとポケットの中から白い封筒を取り出し、ヴァンの元へ歩いてきた。

「お前には暫くの間、別行動を取ってもらう。この手紙をお前の家にいる婦人に渡せ」

あの少女の事を知っている！ しかしそれ以上に、見知らぬ少女を家に上げたことを何と説明しようかと気が気でなかった。

「ヴァン。お前がこれから就く任務は2つある。1つはあの婦人の護衛だ。何があっても彼女を護り通せ。もう1つは、お前の家に匿っている事実を誰にも悟られるな。周辺の住人はもちろん、隊のメンバーに違和感を抱かせぬよう行動しろ」

何か質問は？ と言いたげな目を向けてきたので、ヴァンは昨日から最も気になっていたことをデルテロに尋ねた。

「あの少女は何者なのですか？」

「今は答えるべき時期ではない」

そう一蹴するとデルテロはヴァンに背を向け、「今日のところは体調不良と言うことにして帰宅しろ」と言い残して部屋から出て行った。

残されたヴァンは、釈然としない気持ちのまま城を後にした。

こんな真昼間に家路に向かうことなど今までなかったせいか、商人と主婦で賑わう市場に疎外感を覚え、そそくさと広場を抜けた。

やがて人通りが少なくなる裏路地に差し掛かると、道の向こう、普通の視力では見えない距離に捨ててある鏡の破片に目を凝らした。鏡に映る自分の背後の風景に怪しい人影がないことを確認すると、見慣れたアパートの階段を上り、今日に限ってやけに重そうな鉄の扉に鍵を差し込むと、そつとドアを開けた。

扉をくぐり、耳をすませながら廊下を進む。しかし家の中からは何も物音が聞こえなかった。ドアは鍵がかかっていたから、例の少女は家の中にいるはずである。

明かりの点いていないリビングに入り寝室のドアに目をやる。扉は閉まったままで、近づいて耳を澄ませも物音一つしない。「人の家でよくこんなに寝てられるな」そうぼやきながら振り返った瞬間、ソファアーに横たわる死体を見つけた。

「うわぁ！」

ヴァンの本気の驚きを合図に、死体が喋り出した。

「……あなた、私を放って出かけるなんて、なかなか勇敢なのね」

今にも泣き出しそうな声でも、威圧感は込められるんだなあ、と跳ねる心臓をなだめながら思った。

「明かりも点いていない見知らぬ部屋で、私がどれだけの不安を感じていたか、あなた想像できるかしら」



先ほどの死んだような表情に、少しずつ火が灯り始めているのが見て取れる。安堵7割、怒り3割といったところか？

多少平静を取り戻し、ランプくらい勝手に点けるよ、と言い返そうとしたが、先ほどのデルテロの指令を思い出して言葉を飲んだ。ヴァンのいない時間帯に部屋の明かりが点いていたら面倒な事になっていた。マッチのしまつてある場所が分かり辛くて助かった。

「それにこの家、ろくな食べ物がないのはどういうこと？」

そう言われて、最近ポーと外食ばかりしていたせいで台所にはコーヒー豆とウイスキー、それと数年間放置してある保存食しかないことを思い出した。

「いや、あれだよ。不安で胸が一杯で、何も食べられないだろ？」

咄嗟に返したジョークは、当然のことながら火に油を注ぐだけの結果にしかならなかった。

すっかり調子を取り戻した少女から散々罵りの言葉を浴びた後で、ようやく本題に入ることができた。

「それで、この封筒を預かってきた」

デルテロと少女の関係がいまいち分からないため、手紙の主は仕事の関係者、と言うことにしておいた。

「これ、”あの人”からだわ」

「あの人って、いつも手紙をくれたって人のこと？」

「そうよ。ほら、この手紙微かにオリーブの花の香りがするでしょ？ 間違いないわ」

差し出された手紙を嗅ぐと、確かに紙以外の香りが混じっているようだったが、花の香りなど気にしたことがないヴァンにとってオリーブとそうでない花の香りの区別などつかなかった。

「香りについては分かったよ。それで、手紙には何が書いてあるんだ？」

「ええっと、少し待って頂戴」

真剣な表情で手紙を読む少女を、特にすることもなく見守った。手持ちぶさたで居心地が悪くなると、ヴァンは近くにあった椅子に座り、頬杖について時間が過ぎるのを待った。何が面白いのか、時折クスツと笑みをこぼす少女を眺めながら、せっせとオリーブの香りを手紙につけるデルテロの姿を想像し、気持ち悪くなってすぐにやめた。

やがて少女は、満足気な顔で手紙を胸に抱きしめながら余韻に浸り始めた。

「……それで？」

いい加減待ちくたびれたヴァンが問いかけると、ようやく少女が喋り出した。

「大したことは書かれてなかったわ。私の身を案じて下さった事と、引き続きあなたの下で暮らすよう書いてあっただけ」

「収穫ゼロか」

結局、状況を理解できないまま、デルテロからの指令を守るしかない。何となく予想できたとはいえ、せめて護衛の期間くらいは知りたかった。

「ねえ、この手紙をくれた人ってどんな方？　きつと素敵な方なんでしょうね」

キラキラ光る視線を真つ向に受け、ヴァンは言葉に詰まった。寡黙＋無愛想がウリの隊長は、きつと少女の妄想とはかけ離れているに違いない。しかし下手なことを言って余計な反感を買っても面倒なので、どうデルテロの性格を褒めようか悩んでいると、

「　　やっぱりいいわ。予め印象を聞いていたら、初めて会うときのドキドキが薄くなってしまうもの」

と、勝手に自己完結していた。

「それよりも、私お腹が空いたわ。何か買ってきて頂戴。あ、私獣臭い肉は嫌いだから。野菜のたっぷり入ったポトフにパン、それと香ばしいバターの香りがするお魚のソテーがいいわ」

少女に追い出される形で家から放り出されたヴァンは、しびしび今日三度目の市場に向かつて歩き出した。「夕飯を指定するなんて、あいつどんな神経してんだ？」と愚痴をこぼしたところで、そう言えば相手の名前を知らない事に気がついた。まさかデルテロと同じ

ファミリーネームじゃないよな？ そんな言い得も知れない場面を想像し、やはり気持ち悪くなってすぐにやめた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4288v/>

---

王国キット

2011年10月25日01時06分発行